

大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の問題について

大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）（以下「試行調査」という。）の趣旨については、10月6日付で公表した試行調査実施協力校向けのペーパー「平成29年11月に実施する大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の趣旨について」にあるとおりですが、問題冊子の公表にあたり以下の点を補足説明させていただきます。

<試行調査問題の作成体制及び作成期間について>

- 大学入試センター・新テスト実施企画委員会に設置された問題調査研究部会の科目別ワーキンググループで担当。高校の各教科の学習成果として身に付いた大学教育の基礎力を適切に捉える作問となるよう、大学入試センターに科目別ワーキンググループの運営にあたる各教科の試験問題企画官を常勤で置くとともに、科目別ワーキンググループには高校教員も委員として参加し、高大双方の知見を反映させながら作問していくための体制を整備。

なお、実際に試験で使われる問題の作成には通常2年程度を要するが、今回の試行調査の問題については、昨年8月に文部科学省が公表した「高大接続改革の進捗状況について」においてプレテストの実施について示された後、昨年秋に委員を選任、本年夏まで10ヶ月程度で集中的に議論し作成。問題点検の作業についても今回は別部会を設置せず、科目別ワーキンググループにおいて併せて実施。

<問題のねらい等について>

- 知識の理解の質を問う問題や思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題を、各科目におけるすべての分野で重視。解答に従来よりも時間がかかることが想定されるが、選抜試験の機能を果たすために必要な一定の間数を維持することや、各分野における問題のイメージをまんべんなく網羅することが必要。結果として、今回の試行調査の問題は最後まで解ききれない生徒がいる場合も想定し、問いの並べ方などにも留意しながら作問。
- 問題の中では、教科書等で扱われていない初見の資料等も扱われているが、あくまで「どのような場面でも、既存の知識を発揮したり授業を通じて身に付けた思考力等を発揮したりできるかどうか」を問うための題材として用いているものであり、それらの資料等の内容自体を知識として問うことを意図したものはないことに留意。
- 問題冊子のページ数は、例えば物理などは平成29年度本試験よりも減少しているが、資料の活用を重視した歴史科目や、問題解決の過程を重視した数学などでは特に増加。ただし、今回出題される問題はあくまでも検証のためのものであり、必ずしもこのまま平成

32年度からの大学入学共通テストに受け継がれるものではないことに留意。

- なお、今回の試行調査においては、得点の分布情報を利用した段階別表示や得点調整など、素点以外の成績提供の在り方についても検証する予定であることを踏まえ、目標平均正答率は設定していない。

<平成32年度に向けた問題構成や内容の検討について>

- 今回の試行調査の正答率や解答の傾向等の分析を踏まえ、大学入試センター試験に関する既存のデータも活用しながら、問題の構成や内容等を検討し、今回のような探究の過程等を重視した問題をどの程度のバランスで出題するのか見極めていく予定。
- 問題構成や内容の検討に当たっては、科目別ワーキンググループにおいて今回の試行調査問題の作成に携わっていない外部有識者からの意見を聴取し反映していく予定。現時点でいただいている有識者のコメントについては別紙の通り。

<記述式問題の自己採点について>

- 記述式問題の自己採点については、参考動画を大学入試センターのホームページで公開中。なお、今回の試行調査における国語の記述式問題の正答の条件については、単純な要素の組み合わせではなく、文脈を構成できているかどうかを条件としている多少複雑なものも含まれており、自己採点がどの程度可能かなどを見極めていく予定。